

「生命誕生の授業」における児童の認識

—三重大学教育学部附属小学校2008年度3年A組、5年C組の「赤ちゃんの旅」文集の分析—

佐藤 年明¹⁾・杉村 伸一²⁾・藪中 俊典²⁾

本稿は、佐藤「小学校性教育における『生命誕生過程』の授業実践の自己分析」(2008年)、「三重大学教育学部附属小学校での2つの実験授業における指導効果の比較検討」(2009年)の続編である。過去2稿で自己分析した授業実践「おなかの中の赤ちゃんの成長」(2007年3月2日、4年B組、全2時間/2007年12月11日、4年C組、全2時間)に続き、2008年度に「おなかの中の赤ちゃんの成長」(2009年1月22日・28日・29日・3月5日、3年A組、全5時間)、「赤ちゃんのいのちの始まりから誕生まで」(2009年1月22日・28日・2月13日・3月3日・6日、5年C組、全5時間)を実施した。2008年度実践は初めて複数の学年学級での並行的実施となった。両学級の学習内容には違いがあるが、学習の総括として子どもたちに「赤ちゃんの旅」と題する作文を書かせたことは共通している。そこで授業者・佐藤と両学級担任の杉村・藪中の共同討議により、学習内容である胎児の成長に関する児童の認識および感情を分析することを今次実践の総括の主要課題に据えた。

なお本稿は、平成19年度～21年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「共生社会における性教育の現代的意義—スウェーデンの先進的事例に学ぶ—」(課題番号19402048)の一環としての、日本における基礎研究の一部をなしている。

キーワード:「性教育」「生命誕生」「感想文」「児童の胎児観」

1. はじめに—はじめの複数学年での並行実践

佐藤の三重大学教育学部附属小学校における〈ヒトの生命誕生〉に関する授業実践は、2008年度で第3年次となり、初めて複数の学年学級からオファーを受けた。第1・第2年次の授業はいずれも4学年であったが、第3年次は3学年と5学年である。3学年はこれまでより低い学年であるので、児童にとってわかりやすく関心を持ちやすいような学習過程の工夫が必要になる。また5学年児童の3分の1は、第2年次の授業で出会っているため、単なる繰り返しとならないよう工夫が必要である。

これらに留意して行なった両実践を展開過程に沿って分析し、また両実践を比較検討することも必要であるが、本稿ではそれとは異なる限定的な総括作業を行なった。

第1次・第2次実践では、準備過程で対象学級の担任教員に授業者の意図や計画を伝え、意見を求めたが、分析・総括作業は授業者が単独で行なった。そこで、第3年次の第3次実践(3年A組)・第4次実践(5年C組)については、両学級担任の杉村教諭・藪中教諭と佐藤の3名で総括作業を行なうにした。しかし、第3次・第4次実践合わせて10時間の授業実践を詳細に分析する作業は時間的に難しい。そこで、両実践に共通して実施した学習過程終盤での「赤ちゃんの旅」作文について共同

検討することが、初めての複数学年学級並行実践という貴重な機会を有効に活かすことにもなると考えた。

本稿は上記のような経緯を踏まえて、1～5を佐藤が、また6を藪中、杉村、佐藤が分担執筆した。

2. 授業全体の構成

第3次実践(3年A組)の構成は、以下の通りである。
[到達目標]

- (1) 人間の胎児は、受精から出産まで約280日間母親の胎内で生活すること、その間体長が約2000倍になるなど、驚異的な成長を遂げることがわかる。
- (2) 人間の胎児も、成長の初期には他の動物の胎児とよく似た体つきであり、えらやしっぽ・太い体毛なども持っていること、胎内での成長に伴ってそれら初期の特徴は消滅し、人間らしい体型に近づいていくことがわかる。
- (3) 胎児と母体を結ぶへその緒は、酸素・栄養の摂取と老廃物の排出の機能を持ち、胎児が生きていく上で不可欠の「命綱」であることがわかる。

* ()内は、各節の到達目標を示す。

- 0-1. 自己紹介(教育学部の教員であることを紹介する。)
- 0-2. 家族紹介(学習の導入として、授業者の子どもたちのことを紹介する。)
1. 受精から誕生に至る胎児の驚異的成長
 - 1-1. 出生直後の胎児(出生直後の胎児の身長が約50cmであることを確認する。)
 - 1-2. 受精から出生までの身長を驚異的に伸び(受精から出

¹⁾ 三重大学教育学部学校教育講座

²⁾ 三重大学教育学部附属小学校

生ままでに、赤ちゃんの身長が約 2000 倍に成長することを実感的に把握する。)

2. 母胎内での胎児の形状変化 (ヒトの胎児の成長過程と、他の動物のそれとの共通点と違いを知り、そこからどんなことが言えるかを考える。)

※第 1 時の授業をめぐる質問や感想を出してもらおう

3. 母胎内での胎児の生活の不思議
 - 3-1. 子どもたちの疑問を相互交流する (前時終了時の子どもたちの疑問点を相互に知り合う。)
 - 3-2. 母胎内の胎児の映像を見る (動画を見ることで、母体内で胎児が活着していることを実感する。)
 - 3-3. 胎児の生活を想像する (胎児の母体内での生活と今の自分たちの生活の違いを考え、また疑問点を発見する。)
 - 3-4. 子どもたちの予想・質問集から学習をはじめ
 - 3-5. ヘその緒 (臍帯) の役割 (胎児が臍帯を通じて母胎から栄養・酸素を受けとり、また老廃物を排出していることを知る。)
 - 3-6. 赤ちゃんとお母さんの血は混じり合わない (胎盤において栄養・酸素や老廃物の交換が行なわれていることをイメージできる。)
 - 3-7. 赤ちゃんの食事 (赤ちゃんは - 原則として - 口から栄養を摂取しないことがわかる。)
 - 3-8. 胎児の排泄行動 / 飲む / 食べる? / しゃべる? (臍帯を通じて栄養を摂取し、老廃物を排出できるにもかかわらず、胎児が排尿行動をしたり羊水を飲んだりすること、それは出生後の消化・排泄等の行動に向けての訓練ではないかとも考えられていることを知る。)
 - 3-9. 胎児の聴覚
 - 3-10. 胎児の視覚
 - 3-11. 逆子

4. まとめの作文「赤ちゃんの旅」

第 4 次実践 (5 年 C 組) の構成は、以下の通りである。

[到達目標]

- (1) 受精のためには性交 (ペニスとワギナの結合) が必要であることがわかる。
- (2) 人間の胎児は、受精から出産まで約 280 日間母親の胎内で生活すること、その間体長が約 2000 倍になるなど、驚異的な成長を遂げることがわかる。[復習事項]
- (3) 人間の胎児も、成長の初期には他の動物の胎児とよく似た体つきであり、えらやしっぽ・太い体毛なども持っていること、胎内での成長に伴ってそれら初期の特徴は消滅し、人間らしい体型に近づいていくことがわかる。[復習事項]
- (4) 胎児と母体を結ぶヘその緒は、酸素・栄養の摂取と老廃物の排出の機能を持ち、胎児が生きていく上で不可欠の「命綱」であることがわかる。[復習事項]
- (5) 出生は胎児と母親の共同作業であること、出生直前に肺呼

吸に切りかわり、胎内の生活とは一変した新たな生活が始まることがわかる。

(0~2 は第 3 次実践と同じ構成であるため省略する。)

3. 胎児の生活を想像する (胎児の母体内での生活と今の自分たちの生活の違いについて、予想できることを共有する。)
 4. 受精のためにどうしても必要なこと = 性交
 - 4-1. 卵子はこのようにつくられる (卵子は約一ヶ月ごとに 1 個つくられること、卵管で精子と出会うこと、受精できる時間はわずか数時間しかないことを知る。)
 - 4-2. 精子はこうして卵子と出会う (性交) (男性のペニスが女性のワギナに挿入されることによって精子が女性の胎内に送り込まれることを CG 映像で理解する。)
 5. 臍帯 = 赤ちゃんとおかあさんの命綱
 - 5-1. ヘその緒 (臍帯) について知っていること
 - 5-2. ヘその緒 (臍帯) の役割 (胎児が臍帯を通じて母胎から栄養・酸素を受けとり、また老廃物を排出していることを知る。)
 6. 胎盤の機能をイメージする
 7. 胎児の排泄行動等 (臍帯を通じて栄養を摂取し、老廃物を排出できるにもかかわらず、胎児が排尿行動をしたり羊水を飲んだりをすること、それは出生後の消化・排泄等の行動に向けての訓練ではないかとも考えられていることを知る。)
 8. 胎児の潜在能力
- ※前回の授業へのみんなの感想や疑問を取り上げる
9. 胎児の体型変化
 10. 双子誕生のドキュメンタリーを見る
 11. まとめ = 「赤ちゃんの旅」の作文発表

3. 作文「赤ちゃんの旅」の位置づけ

第 3 次実践では、最終第 5 時の末尾に、この課題を下記のように説明して提起した。

「いのちのスタートから誕生までの赤ちゃんの旅について、みんなが赤ちゃんになったつもりで書いてほしい。赤ちゃんは書けませんけど、赤ちゃんになったつもりで、どういう旅をしてきたか。ここで習ったことを書いてもいいんですよ。でも、習わなかったこととか、疑問が解けなかったことで、『こうじゃないかな?』と思うことを想像して書いてもかまいません。正しいことだけ書くんじゃないで、『こうかな?』と思うことをぜひ…ロマンチックな赤ちゃんの旅を書いて下さい。」

回収した作文は、後日文集にして配付した。

第 4 次実践では、最終前時の第 4 時に、下記のように説明して課題提起した。

「赤ちゃんの旅…性交から始まって、おなかの中でどんどん大きくなって、(誕生のところは 6 日にまだ残ってるんですけど) そこまでやった後で、赤ちゃんの旅について、勉強してないこととか、疑問がまだ解けてないこ

ともあると思うんですよ。『こうじゃないかな?』と想像してもらってもいいんで、赤ちゃんの旅という作文を6日までに書いてきて下さい。」

そして最終第5時の末尾に「赤ちゃんの旅」作文の発表時間を設けた。子どもたちは発表することを恥ずかしがったが、それでも11名が発表してくれた。

4. 3年A組の「赤ちゃんの旅」作文事例と分析

「赤ちゃんの旅」作文は、「旅」という流れや構成が重要な文章であるため、省略せず全文を紹介した。このため、紙数の制限もあり取り上げる作品数を限定せざるを得なかったことを予めお断りしておきたい。(下線は佐藤)

①(第一章) 仲間をおって

ある日ほくが目ざめたらそこは暗い部屋。あたりをよく見回してみると、仲間がたくさんいた。その中の一つがほくだ。その時は名前も何もついていなかった。小さい小さい生き物だ。ある日、みんながきゅうに動き出した。ほくは、聞いた、「何をするの。」「長い旅だよ。」一人の子が教えてくれた。ほくは、えっと思った。だがほくは、だいじょうかなあとふあんで心配だった。そして、いよいよ、本当に動き出した。日に日にほくは仲間についていった。とちゅうで力つきたりのおくれたりしたやつもいた。でもほくはひっしについていった。つぎの日もつぎの日も仲間を追いかけた。みるみるほくの体はやせ細っていく。それでもいつまでも。

(第2) せいしとらんしがまじわる。

ほくたちの仲間がどんどんへっていった一おく匹ぐらいいたのが百匹にへっていた、ほくたちの仲間も顔色がすごくへんで今にも死にそうだった。ほくは、「あっあそこになにかある」と言いました。そうしたら、「みんなおいで～」と言われた。ほくは、さい後の力をふりしほって声をかけてくれた生物にとびこんだ、ほくが一番のりだった。ほくは、その生物に言った。「きみだれ、そしてほくだれなんだ…」そしたら、「ほくはらんしあなたはせいしだよ」とらんしは言った。そして、らんしは、もうせいしが入ってこないようにガードをはりました。ほかの子はしんでしまいました。そして、新しい命のはじまりです。

(第3) 赤ちゃんたんじょう

ほくはいつのまにか手や足顔もついていた。まだほくは小さかった。お母さんからごはんをもらっているおいしいなあザア血えきがながれている。ほくはだいたい大きくなった。ほくは足でどどんおなかをけた。そうすると、どこからか、「どどんしているね。」と声が聞こえる。「はやく生まれてね。」ほくは、しゃ

べれないけどアピールした。五時になったついに母さんにげきつうが始まったついに手ずつの時がきました。三時間かけてやっとうまれました。「オギャーオギャー。」これがきせきです。一おくもあるせいしから一匹えらばれた物です。ほくは自分で自分をすごいなと思います。1999年6月21日これからも命を大切にしていとも気をつけていきたくたいです。

(KS)

3Aで最も長い作品である。3Aでの学習の出発点は、事前の藪中教諭との協議に基づき、これまで2年次に渡る4学年での実践と同様、性交を扱わずに精子が卵子と合体する瞬間の写真を提示することから始めた。従って、この作品の「第一章」「第二章」は、KS児の自学に基づく想像である。多くの児童が精子と卵子の合体から叙述を始めているが、それ以前の過程に触れたものも数名あった。なお、KS児の作品の「第三章」も前半は授業の学習内容であるが、後半の出産については学習していない。授業での学習事項だけにに基づくのではなく、自由に想像してよいと指示したので、精子の旅の始まりから出産までのトータルな物語を描いたのである。

②ある日せい子くんとらん子ちゃんが道で歩いていてぶつかりました。そのとき、どっちもみとれていました。そして、赤ちゃんにいっしょになりましょう。と言って小さいたまごになりました。たまごから、少しずつ人間の形にかわってきました。だんだんかおと体が出てきて、目ができたよ鼻も口もできたよ手と足ができたよゆびも五本できたよもうわたしたちは人間だ。こんどは、はやくでて外をみたいよ。声が来こえたお母さんの声かな? はやくお母さんを見てみたい。わくわくなんだかきつくなってきたよ体も顔も大きくなったよもうすぐしたら外にでれるかな? なんだかちょっとさがってきたよ、あともうちょっとかな? 外はどんな所だろう。なにがあるのかな? あっ顔が外にでた。はやくでたいはやくでたい「ば」あでたウェーンウェーン自分でこきゅうができた。やった。

(TK)

精子と卵子の結合以前の経過を授業では学習していないことが、TK児の場合はメルヘンのストーリーを創作することに結びついている。この児童の胎内生活のイメージは、体の器官が次々に作られ、成長しながら誕生を待ちわびている、というものである。授業では、栄養摂取・排泄・呼吸・視覚・聴覚など、胎児の身体機能に注目したのだが、TK児の関心は、器官の形成の方にあったようだ。

③1998年のある日、ぼくは、2おくこいじょうのせい子の中かなぜかぼくだけがえらばれて、小さな小さなたまごになりました。いったい、ぼくは、どうなるの？あんなにたくさんのもだちがいたのに、ひとりぼっち。ぼくは、たった1人で、まっ暗でせまいへやにとじこめられてどンドンちがうかたちに変化していったよ。ぼくは何になるのかな。ここはどこかな。ぼくが少し大きくなって、気がつくとおくのおへやは、お水だらけ。ぼくは、一日中気持ちよく、プカプカういていたよ。時々まだだから、手や足をバタバタ動かして、水あそびをしていたよ。そしてつかれてのどがかわいたらえいようのお水を飲んでどンドン元気になったよ。でもぼくは、まだ何も食べられなかったからお母さんからさんそとえいようをもらっていたんだ。このへやは、暗くてきゅうくつけどとつてもふわふわプカプカ、まるでうちゅうにいるみたいで、ぼくは、たくさんのきらきらした星にかこまれているゆめをよく見たよ。それから、時々お母さんの話とか笑い声とか、きれいな音がきこえたよ。とても外がどんな世界か早く見たくてがまんできなくて、大きくなった足でおへやをけったり手でパンチしたりして合図したけど気づいてくれなかったよ。このおへやの外はどんな世界かな？楽しそうだな、早くでたいな…。1999年5月16日午前5時47分ぼくは、まっ暗なへやからとつても明るい世界へ10カ月もかけてやつととび出しました。あーよかった。(KH)

胎内生活についてKH児は、孤独、まっ暗、狭い、窮屈などの負のイメージと、気持ちいい、プカプカ、ひまなどの正のイメージを持っている。いずれにしても、外の世界への誕生を待つ準備の時期というとらえ方である。

④精子がおよぐようにらん子にぶつかろうとしてたった一びきの精子がらん子に入った。これで命がたんじょうした。その高さは0.1mmぐらいのころでした。それから一日一日えいようをもらってすくすくそだっていきました。270日しかはたらかないたいばんの中の水を毎日750mlのんでえいようももらって育ちました。255にちごろぼくはうごいてお母さんのおなかをドン、ドンとたたいた。268日がたつたころおかあさんにふくつうがきてぼくもでるじゅんびをしていた。270日ぼくやつとはじめて外にでれました。

(IR)

IR児は数字(受精卵の直径、胎児が飲む羊水の量、胎内生活の日数)にこだわっている。羊水を「胎盤の中の水」と誤解している。授業では第3時に胎児が羊水に

よって満たされた袋の中で生活していることは押さえたが、煩雑さを避けて羊膜・子宮などの用語は教えていない。胎児と母体がへその緒でつながれていること、へその緒が母胎につながる接続面に胎盤があることは図示して教えたが、IR児の母胎の構造理解には混乱があったようだ。胎盤の機能についてNHK「驚異の小宇宙 人体」DVDの映像で学習したことが強く印象に残っていたのかもしれない。

⑤せい子とらん子が合体して命がはじまりました。命は、お母さんのおなかの中ですんでいました。赤ちゃんは、へそのおを、気にしていました。理由はへそのおはなにかということです。おなかの中であばれていました。えいようをとつてぐんぐんそだっていきました。やがて、まくが、小さくなったようにかんじられました。外からなにか聞こえてきました。よくわからないので聞くのをやめとききました。赤ちゃんは、なくれんしゅうを心の中でしていました。さかさまにむいて、「おぎゃー」と生まれました。よかったと赤ちゃんは思いました。(IY)

IY児のへその緒に関する記述は興味深い。授業では胎児の胎内生活に関する学習の最初にへその緒を通じての胎児の母胎とのつながりについて学習した。この結果IY児自身がへその緒を強く意識するようになったのであろうが、赤ちゃんがへその緒は何かを気にするとはどういうことだろうか。「へその緒は大事なんだけど、その意味は赤ちゃん自身にはわからないだろうなあ。」ということなのか？それとも、「赤ちゃんは、自分の体に付いている太いホースみたいなもののことが気になるだろうなあ。」ということなのか？

5. 5年C組の「赤ちゃんの旅」作文事例と分析

①らん子のからをつきやぶつて、一びきつきやぶつた精子が、男性のDNAや情報を伝える。そして、男性と女性の情報を照らし合わせて、男性と女性のDNAをもつこどもが生まれる。メダカやワニやブタと似た原型を持つ、「赤ちゃんのもと」ができる。しっぽがなくなり、まわりは羊水がしょうげきなどから赤ちゃんを守り、目がしっかりとできて、体の形が、がっしりとしてきて、(おしっこなどもする)へそのおから栄養をもらい、また、へそのおを通していらないものをすて、(一部のウイルスなどもはいる)赤ちゃんがたんじょう!!(HM)

妊娠初期のヒトの胎児の体形が他の動物の胎児と類似していること、当初しっぽ状のものがあるが後に消失す

ることは第1時に、へその緒の役割は第2時に学習した。DNAのことや胎盤が一部のウイルスを通してしまうことは、学習課題とはしていないが、第2時に視聴したNHK「驚異の小宇宙 人体」DVDの説明の中に出てきた。HM児は、授業中に得た情報を多く盛り込んで物語を構成している。

②ぼくは真っ暗な羊水の中でひとりぼっち、たまにお母が話しかけてくるが、そんなのじゃものたりない。そこで考えた。その他の仲間に会う前にどう接すればいいか、どう笑ったらいいか、このたっぷりと時間のある真っ暗な空間の中で練習すればいいのだ。そしてむかえた本番、この世に現れ、初めてすう空気、初めて会う仲間。うまくできるかな？ (NM)

NM児は、授業で学習した胎児が生まれてからの生活に向けて身体機能を使う練習をするという事実を、「孤独で暇で時間がたっぷりある」という胎内生活観と結びつけて説明している。

なお、同児は第4次実践第2時の感想文に「もともと性交のことは知っていたけれど、大たんはその事を言ってくれたので良かった。」と書いていた。

③ぼくが生まれてなかったときの話。ぼくはまだ目が見えず真っ暗やみの中でくらしていた。でも、経験からいくと、せまい空間の中とじこめられるようにして毎日毎日永遠にくらしているようだ。また、はらの部分から長いひものようなものが上の方へ続いていることもわかった。さらに、上の方からかすかながら女の声が聞こえているようだ。もしかしたら、このひも(へそのお)をたぐれば、その女の人と二人でくらせると思い、ひつ死でひもをたぐっていった。だが体と気持がかみ合わず、失敗に終わった。ぼくは、またこのままずっとくらしていた…。ある時まぶしい光が差しこんできた。そして、その光の中にはい出した。そこで、ぼくは、初めて同じ様な「仲間」を見つけたので、とてもうれしくて、泣いてしまった。

(IK)

IK児も、胎内生活が真っ暗でせまく、また永遠に続くかと思うほど長いとイメージしており、出生児の泣き声は同じ人間に出会ったことによるうれし泣きだと解釈している。また、胎児はまだ母親というものが認識できないが、胎児と「女の人」をつなぐへその緒が重要であるということで、物語を作り上げている。

④暗いしひまだなー。でもお母さんのおなかは、すごく温かい。ゴクゴク。羊水ってけっこうおいしい。お

母さんいつも栄養ありがとう。私は、お母さんのおなかの中はせまくてひまでいごちわるい。やっぱりひまだ。お母さんのおなかかけてやるー。ポヨーン。お母さんには、勝てない。最初は、ぶさいくだけど、どんどん育ってきれいになるからね。私は、お母さんのところに生まれたかったから何億人もいるみんなとたたかったよ。たった私だけがのこってここにいるんだ。がんばってお母さんのおなかから出ていろんなことしようね。(ON)

ON児には、まだ幼い妹がいる。妹が生まれる過程を回想して作文を書いたのであろうか。胎内が狭くて居心地が悪いというイメージと共に、他の精子との競争に勝って受精したのもお母さんに会いたいからとして、誕生による母親との対面を楽しみにしながら胎内生活を送っているというとらえ方をしてしている。

⑤赤ちゃん太郎君の旅

「ポコッ」赤ちゃんの太郎君は、元気な音とともに、旅に出ました。太郎君のまわりには、からがあります。そう、太郎君は今、卵子として、せん毛に動かされ、子宮に向かっているのです。「ああ、早く精子とくっきたいなあ。」しかし、それを口では言えません。体が無いのです。でも、細胞が分れつしていきます。そのころ、お母さんとお父さんは、お医者さんと相談して、性交をしました。精子も、「早く卵子と出会いたいなあ。」と思っています。でも、それが出来るのは、三億ある精子のうちたったの一つの精子だけです。精子たちは、卵子に向かってまっしぐら。どんどん進んでいきます。ミトコンドリアのエネルギーを使って、進む、進む。

そして、エネルギーを使い果たしたころ、一つの精子が、こう素でからをやぶり、受精しました。卵子と精子のDNAが結び付き、今から、太郎君は、人のすがたに成長していきます。(後略) (KN)

KN児の作品は5Cで最長であるが、紙数の都合からこの作品に限り後半部分を省略した。この作品で注目したいのは性交に関する説明の部分である。授業では、NHK「驚異の小宇宙 人体」のCG画像を視聴させて、父親の「おちんちん」が母親の体の中に挿入されることによって精子を卵子のところまで送り届けるメカニズムを説明した。しかし、どのような経緯で父親と母親が性交に至るのかについては説明しなかった。KN児はその部分のストーリーを埋めようとして「お医者さんに相談して」という説明を生み出したのであろう。受精を確実にするためのアドバイスを受けたのであろうか。あるいは、妊娠を希望しながらなかなか実現できな

い夫婦が医師に相談するというような情報を得ていたのかもしれない。KN 児の物語は、性交だけでなくそれ以前の過程も含めて、生殖メカニズムの面からだけでなく人間関係の面からも学習を行なうことの必要性を示唆している。しかし、ここには privacy も絡んでおり、適切な教材の編成は容易ではない。

6. 両クラスの作文事例の比較

ここでは、作文事例についての3名の共同討議に基づき、まず両クラス担任の藪中、杉村がコメントを述べ、最後に佐藤が全体を総括する。

3年A組の作文について（藪中俊典）

第1時は、佐藤先生から、受精から胎児の成長について絵や写真を通じて教えていただく形で学習を進めた。第2時以降は、子どもたちの疑問を取り上げ、それについてみんなで意見を出し合ったり、佐藤先生に答えてもらったりする形で学習を進めていった。

第2時では、第1時で胎児について興味をもった子どもたちからは様々な疑問が出されたが、「音や声が聞こえているのか。」「呼吸をしているのか。」「しゃべることはできるのか。」「どうやって栄養をとっているのか。」「うんちやおしっこはするのか。」といった疑問をもつ子どもが多くいた。子どもたちは、妊婦さんのお腹が大きいことや2年生までの生活科での「自分自身の成長」の学習から、お腹の中で胎児が大きくなっていくことや自分自身がお母さんのお腹を蹴っていたことなどは分かっているようであったが、胎児の様子についてはあまり考えたことがなかったようであった。佐藤先生からの説明は、映像も用いたものではあったが、3年生の子どもたちにとっては、やや難しいものであった。しかし、作文の中に「お母さんからごはんをもらっているおいしいなぁザァー血えきがながれている。」(KS)「たいばんの中の水を毎日750mlのんで」(IR)などが書かれているのを見ると、子どもたちなりに自分たちの疑問について知りたいという思いをもって意欲的に学習していたことが分かる。

5年C組の作文について（杉村伸一）

5年C組では約三分の一の子が、4年時に佐藤先生から「命」についての学習を受けている。5年生では、そのことを踏まえ、どの子も同じ条件で学習が始められるよう、4年時に学習した内容を含めて「命」の学習を始めていただいた。しかし、今回はさらに奥深く学習を進めるという意味で、新たな試みとして、「性交」「出産」という2つのことを学習に取り入れた。

担任として、正直、「性交」を取り扱うことには抵抗があった。それは、「思春期を迎えた5年生の子たちに『性交』を教えていいのだろうか。興味本意で終わってしま

うのではないか。担任として、今後の学習はどう展開していけばいいのだろうか。」などの不安があったからだ。しかし、佐藤先生と話し合いをもち、第一歩を踏み出すことにした。

「性交」を取り扱う時間はほんの1時間であり、そのメカニズムを説明したCG画像を視聴させただけで、どのような経緯で父親と母親が性交に至るのかについての詳しい説明はしなかった。はっきり言って、子どもたちの中には、「性交」についての印象はあまり残らなかったようだ。それは、「赤ちゃんの旅」作文にも表れている。「性交」について学習したにも関わらず、たったの数名しか「性交」についてふれていなかった。また、「性交」については親から教わり知っていた子ですら、そのことについては書いておらず、羊水の中の赤ちゃんの心情について、ひたすら書き綴っていたのである。

もう一つの新たな試みは「出産」である。「命」の尊さを知る上で、「出産」は欠かせない。授業では、ある母親の出産シーンのビデオを視聴させた。もちろん母親の出産時の姿を見せることをねらいとしていたのであるが、もう一つ、この母親の娘、つまり産まれてくる双子の姉の姿も、子どもたちに見せたかったのである。姉は、母親の出産する姿に顔をこわばらせ緊張している。その後、弟が産まれてきたときは、緊張から解き放され感動のあまり父親の胸の中で泣くじゃくるのである。子どもたちは、そのような姉や母親の姿を通し、「命」の尊さを感じ取ったようだ。学習後の「赤ちゃんの旅」には、「お母さんが僕を待っていてくれた。」「僕は初めて同じ仲間を見つけ、とてもうれしくて泣いてしまった。」「みんなの笑顔がこちらを向いています。」のような、産まれてきたばかりの赤ちゃんの心情が書かれていた。このことで、「出産」を取り扱った意義が確かめられた。

このようにして考えると、子どもたちは、「性交」についても理解したと考えられるが、それよりも、赤ちゃんが羊水の中で守られていた時のこと、へその緒の大切な役割、また、産まれてきたときの感動についてのことの方が心に強く残ったようだ。

暫定的な総括作業を終えて（佐藤年明）

私が行なった授業について、両クラス担任とともに総括討議を行なうことは私の附属小学校での実践史の中では画期的なことであったが、それでも実践者と実践研究者の共同作業としてはまだ緒についたばかりの感がある。学習者の日常の姿を深く知る担任教師のアドバイスをより立ち入って得ながらよりよい授業過程をつくりたいと願うと同時に、一方では学部教員の投げかけを受け止めていただき、附属学校教員による人間の性の授業をつくりだしていただきたいとも思う。いずれにしても今後とも共同の実践研究を継続していきたい。